

き下さった。

鑄上がってから、何とかして吉田さんにこの鐘を見、音色をきいていただきたいと七月二十七日、大磯の吉田邸へ運んだ。吉田さんは足の具合が悪く籐イスに座られた姿でご覧になり、「あの字がこんなになったのですか」と感心され、美しい静かな音色にうなずかれていた。

吉田さんとのご縁は、昭和二十七年の吉田内閣の時、それまで木であった内閣総理大臣の印を銅印にするのを引きうけて以来のことだった。吉田さんにはその折、号の「素淮」と本名の「茂」の二個の銅印も作ってさしあげた。

この「広島平和の鐘」に先立つこと三年の昭和三十九年、私は一足先きに広島の地に一つの鐘を鑄た。それが「広島平和悲願の鐘」である。

この鐘は、平和祈願に燃えた一人の篤信家の熱意で生れたといつてよい。

金沢大学の助教授であった西村見暁という人がある日突然私の家へ訪ねて来られ「広島に平和祈願の鐘をつくってほしい」といわれた。そしていくつかの注文を出された。一つは、鐘全体に国境のない世界地図を描き出してほしいという。そして

撞座は原水爆禁止の思いをこめて、原子力マークにして欲しいとのことだった。その反対側には撞座と同じ大きさの円型のものを入れ表面を磨いて鏡にしてほしいとの注文もあった。鐘を撞く人が己の心をうつし出すためなのだという。

また龍頭は鳩で、平和のシンボルを表わし、銘文も大変こつたものが施された。

まず、広島市長をつとめられた浜井信三氏が「悲願」の二字を書かれた。これが鐘の名である。そこに広島大学総長をされた森戸辰男氏が「自己を知れ」と記され、ライジ・メーロトラ駐日インド大使がサンスクリット語で「大無量寿経」の一節を、アレクシス・ライアチス駐日ギリシャ大使が、これはギリシャ語で「己を知れ」と記された。これらの自筆の銘文を浮彫にしたのである。鐘の上部には日、月、星座を配した。鐘楼も宇宙をかたどった球形の屋根という異色のものを望まれ、私が特に設計した。口径の大きさは「広島平和の鐘」の倍以上三尺一寸、重量約三百二十貫（千二百キ）。鐘楼は平和公園内にあり、昭和三十九年九月二十日に撞初めを行った。奇しくもこの日はオリンピックの聖火が広島に到着した日でもあった。

それにしても、この鐘にかけられた西村見暁さんの情熱は立派なものであった。